

赤星

月刊

1月2001年 No.1 (通巻343号)

本号400円 (毎月1日発行)
年間購読料 1部 3000円(送料別)
(送料) 密封1000円 開封800円

THE SEKISEI (RED STAR/ROTE STERN)

編集 共産主義者同盟 (DER BUND DER KOMMUNISTEN)

発行所 蜂起社 東京都江東区大島3-9-25/TEL 03-5626-8262
(関西支社)大阪市北区菅栄町10-10 岸本ビル/TEL 06-6357-6975
発行人 南 安明 (振替) 00120-2-1512 蜂起社・南安明

紙面内容

- ① 紙名改題 「蜂起」から「赤星」へ
- ②~④ 共産同第2回総会中央委報告
- ⑤ 共産同規約の全面改定について
- ⑥ 全国野宿者運動の前進へ
- ⑦ クリストフ・アギトン来日報告
- ⑧ 三里塚/沖縄

21世紀の黎明に輝け! 希望の赤い星

“第二の創建”期す新生・共産同(蜂起派)の出帆!

全ての戦う労働者・人民の皆さん、
我が共産主義者同盟は、二〇〇一年、新世紀の幕開けとともに、同盟機関紙の紙名「蜂起」を改題し、一月号より「赤星」(せきせい)へ変更したことを明らかにする。

『蜂起』から『赤星』への機関紙名の改題は、まさに「第二の創刊」に等しいものである。そこには、二一世紀の黎明に輝く希望の「赤い星」を指して、共産同(フント)の再建を図り、もって新左翼運動・共産主義運動の再生に資していく、という我々の烈々たるパトスとダイカルの使命感が込められている。

それは、新生・共産同としての二一世紀への出帆を、「紙名改題」という形をもつて、インパクトのあるメッセージとして全ての戦う労働者・人民の皆さんに告げるためである。

『赤星』に込められた情熱・使命感
共産同機関紙の新紙名・『赤星』は、革命的前進党の政治新聞として、文字通り、戦うプロレタリアートの希望の「赤い星」たろう、とする我々の決意と情熱を含めてネーミングされた。

『赤』は、共産主義とプロレタリア革命の旗色(シボル・カラー)であり、また、血と炎、燃え上がる情熱を表す色でもある。

『星』は、夜空に輝き、暗闇の中でも人々の針路や目指している方向、自分の位置を確かめるための指標となるものであり、また文字通りスター(花形)の意

味がある。
したがって、『赤星』という紙名そのもの(命名)に、「政治的少数派」にとどまっていた新左翼運動・共産主義運動の停滞した現状に終止符を打ち、試練に立ち向かい「時代の困難と苦悩」を乗り越えて、二一世紀の(階級闘争の)新紀元・黎明に輝く「赤い星」だものこと目指す、という使命感、戦うプロレタリアートの希望の「赤い星」たろう、という情熱が込められているのである。

しかも、時代状況は、共産主義運動に、自己の再生をかけた新機軸を急務な課題として要請している。

紙名改題

「蜂起」から「赤星」へ

プロレタリアートの政治新聞 —希望の「赤い星」目指して

共産同中央委員会政治局

と深く慮じられた民衆(フント)の中に、その怒りに火をつけるダイカル(根底的)な運動・組織の創出を求められており、それが二一世紀の共産主義運動再生への展望を切り拓きうる新機軸に他ならないと考えたのである。

怒りに燃える下層労働者・沖縄民衆との連帯運動を、(旧)連・東欧のスターリン主義・「疑似社会主義」の崩壊を転換点とした九〇年代の共産主義運動・左翼運動総体における混沌と停滞

にならばなるほど、その担い手(変革主体)自身の変革(自己変革)をも迫ることになる。プロレタリアートの団結と解放を使命とする共産主義運動の再生と、我々にとって、まさに、このよき革命の担い手・プロレタリアート自身に、自らの思想と実践活動の在り方そのものの変革を不断に促すことを課題とするものと言えよう。

プロレタリアートを社会変革・革命に駆り立てる最大のモーメントは、搾取・収奪の上に暴力をまきまき多数の貧しい民衆を支配している一握りのブルジョア

なものである。
マルクス主義の原則に立ち戻るとは、「現代社会の最下層」(マルクス・『共産党宣言』)であるプロレタリアート・底辺部に追いやり「排除された人々」・「虐げられ抑圧された民衆のその怒り」・「やむにやまぬ」反抗・蜂起——これこそが歴史を動かす、そして心の奥底にある苦しみ・悲痛、これらを真正面から受け止め理解し(また心を熱くして)、自らの運動・組織の血と肉にしようとするのである。これがマルクス主義の思想と階級的立場をつらぬく根本精神

展望する上で、「排除された人々」が、そのキーワードになつているとさえ言える。まさに、今日、怒れる少数者(マイノリティ)や「排除された人々」の存在と闘い、その国の仕組(社会構造)の矛盾や歪みを照らし出す役割を担っているのだ。

言い換えれば、社会から排除され底辺に虐げられた人々やその国の矛盾・歪み・差別構造を集中して背負わされた人々の怒りや苦しみを、その最も深いところまで理解しようと努めることが、社会全体の有り様・全所、また、プロレタリアートの希望の「最後の岩」となっているのだ。

底辺・下層労働者、沖縄民衆の怒り、ここにこそ我々は、二一世紀のダイカル・マルキシズムとラディカルな運動・組織を創り出す座標軸を握らなければならないのである。

また、「こつた政治・組織路線は、他党派との違いが一目瞭然の我々の「特長」であるが、我々は、それをいかに発揮すること、つまり、社会で最も虐げられ、底辺に苦しんでいる人々・プロレタリアートの怒りに応えてこそ、共産主義者としての自らの世界的使命を全うできると考えるのである。

メキシコ・チアパス州の密林から、世界中の民衆に「排除された人々」のため「排除された人々」の連帯行動を訴えた(九九一年一月)サパティスタ民族解放軍(EZLN)、占拠された裂け目から噴出するマグマのように燃え上がっているのだ。

いまや、時代を捉え、社会変革と変革主体の創造を

地ゆえの差別構造によって日米安保軍事同盟の犠牲を基地の重圧という形で集中して押し付けられている沖縄民衆の基地撤去を求める闘い、今日の労働力(雇用)の流動化(不安定化)と相対的過剰化(兼民化)によって「貧困と排除」の集約点となつている三百万人の失業者、三十万人の日雇労働者、三十万人の野宿者(いわゆるホームレス)をはじめとする下層労働者の「STOP/排除、失業NO」の闘い、こつた闘いが、今では、労働運動・連帯運動の最大・最強の「拠り所」・また、プロレタリアートの希望の「最後の岩」となっているのだ。

新生・共産同の出帆へ、戦うプロレタリアートの希望の「赤い星」を目指して!

共産同の新しい希望

共産同第2回総会 中央委員会報告 第二期の創建 期す新生・共産同の出帆!

我が共産同は、新しい世紀(二世紀)の始まりとともに、「第二期の創建」を期し、新生・共産同として出帆するため、同盟第二回総会を開催した。

九六年十二月の同盟中央委員会再建第一回大会以来、四年ぶりに開催された第二回総会は、旧指導部の脱落を乗り越えて新たに同盟員となった同志の結集を得て、九〇年代における十年間の組織再建の闘いとそ

の総括を踏まえ、新世紀の幕開けとともに我が共産同の「第二期の創建」を期して、同盟規約の全面改定を決定し、新中央指導部(中央委員会)を選出した。

はじめに

我が共産同(蜂起派)は、新機関紙「赤星」の「第二期の創建」を期して、二〇〇〇年十二月、同盟第二回総会を開催した。

全ての戦うプロレタリアアートの人民に、我が同盟が、新しい世紀(二世紀)の



00・1・15 山谷・日雇全協決起集会

ブント組織路線の総括

我がブントの組織路線の約したものを提起して、総括に際しては、同盟理論誌「共産主義17号」の特集論文「我が同盟組織建設の

総括と運動―組織論上の課題―(模範)においてほぼ明らかにされている。

新生・共産同へ「第二期の創建」を期す意味からも、

わたった闘い―七〇年安保を乗り越え、七〇年安保を乗り越え、

その結果、自己(党派)としての優位性を競い合

だが、それは、組織の頭数(量の拡大)には関心を

ブントは、労働者人民の怒りをいかに組織し大衆運

我が同盟の再建を本意に

「総括」が批判にさらされ

〈2〉

(3面)

プロレタリアートの



(右) 00・7・20沖繩米軍嘉手納基地を包囲
(左) メキシコのサパティスタ民族解放軍



重い「再総括」が突き付けたのである。

「粉飾決算」の幕を自ら引いた形(「自主廃業」となった。その意味で、我々は、この旧指導部の脱退問題を組織建設の根本である党的團結を強固にするという見地から、「この病気を成長のための病気だと考え、「この病気をなおして初めて、我が党は本格的な革命闘争ができる(レーニン)と握り返して、組織の担い手一人ひとりが自分たちの組織の現状を真剣に考え議論しながら、闘い(組織建設)に生きる共産主義者としてのラディカルな使命感と烈々たるパトスを育んでいくための「苦い教訓」の一つにしなければならぬのである。

およそこんな組織でも内部に意見の違いや論争があるのは当たり前である。また、誰でも弱点や欠点があり、闘いの中で多くの失敗や誤りを犯したりする。問題なのは、意見の相違・対立や弱点・誤り一般にあつたのではない。

たしかに、自らの弱点や誤りを認めることは苦痛を伴うこともある。だが、過去の過ち・敗北から教訓を学ぼうとしないならば、そのような思想性がなければ、「こんな鋼鉄でも徐々にさび付き、それを放置するところが腐蝕してまっ。

我々が直面した「真の危機」とは、自分たちの組織の立ち遅れた現状(脆弱な團結)を直視せず、組織内に孕まれた矛盾や深刻な危機を隠蔽する(臭いものに蓋をする)ことにより、その克服を怠り組織の根本的な立て直しを先送りして

きたことあり、その結果二次フント以来の旧体系的な組織に内在する(歪み、腐敗)を深刻な事態を招くことになる。我々が同盟は、また組織の再建への道筋をたどり始めるべきである。自らの弱点を語ること恐れず、これらの弱点に打ち勝つことを争い、その道程は、長く険しいものである。

だが、二次フント・蜂起派の分裂・敗北からすでに四半世紀以上過ぎたいま、やっとな自分たちの立ち遅れ現状に対する悔しさ、危機感、怒りを同じくしている。プロレタリアートの中心に、一歩一歩着実に刻まれている。我々は、確信をもち、言わなければならない。何度か失敗し挫折し、屈辱を味わい、辛酸をなめながら、決して情熱を失わず、その悔しさをバネに訓練に立ち向かっている。組織建設の前進は図られる。

だが、敗北の結果が重大であること認め、敗北を(宿命として)合理化してしまひ、敗北から(教訓)を学んで強くなろうとしない組織は、いつまでたっても自分たちの團結を強固にすることができずプロレタリアートの前衛闘士としての役割を担えないのである。

3

ていくことを辞さない覚悟と意志を固めたカドールやメンバが形成されていったのである。

失うべきものが何もない、そして組織の他に武器を持たないプロレタリアートにとつて、自らの解放を実現するための最大の武器は、何と云っても「團結」である。搾取・抑圧に苦み、怒りを同じくしているという連帯感(階級意識)を土台に、結束して闘うという團結心をプロレタリアートの中に育み磨き鍛え上げていくことこそ、プロレタリア解放運動(共産主義運動)を勝利に導くことができるかどうか、その鍵を握る最も核心的な課題なのである。

したがって、困難を恐れず、しかも観念的で戦略も無い主観的で無謀な「暴走」によって失敗や誤りを繰り返すのではなく、安易に大衆に迎合することも、また大衆から遊離することもなく、できる限り犠牲性を最小に抑えて革命を勝利に導くためには、政治路線(戦術)を研ぎ澄まし團結力を鉄のように強固に鍛え上げていく、いわば「赤い熔鉱炉」のような役割を果たす党組織を建設することが是非とも必要なのである。単なる馬鹿の衆や都合合わせの野合の徒では、いざという時に力を発揮できない。そのことは分裂と敗北を繰り返してきたフントの「負の歴史」から学んだことであつた。

時代が変わっても闘いが前進すれば、それをおし潰そうとする弾圧が強められるのは変わらない。それゆえ、弾圧の荒野の中でも我々は、プロレタリアートの怒りに深く深く根を下ろした党組織を建設することによって、繰り返し繰り返しの闘いへの意志と情熱を新たに、いかなる弾圧にも屈しない強固な團結力を鍛

え上げていくことができる。目には隠したような日々がやってくるときに、世界史的な使命と壮大な責務を遂行できる能力を、プロレタリアート自身の中に創り出すために、たとえ「亀の歩み」のよつにのろのろとした政治的・組織的な遅滞と停滞の時代にあつても、自己の目的意識と闘争能力と團結力を発展させ強固な党組織を建設していかなければならないのである。

これが「将来の戦闘のために」プロレタリアートの勢力を準備する数十年におよぶ、長く険しい「革命への試練の道程」である。その意味で、これまでの営みは、この「本格的試練」のためのいわば「準備期間」にすぎないと言えよう。

それゆえ、我々は、共産主義運動(プロレタリア革命)の実践活動(組織活動)の諸条件、歴史的状況の変化を度外視して、どんな情勢にも通用する「不変」な「組織形態や活動方法」を求め絶対化する見方(かつての我々の組織観)も、そ

新世紀の共産主義 運動再生の新機軸

1

このように二〇世紀に
は、戦争と革命の炎の中
幾多無数の労働者人民の血
が流され、とりわけ戦争の
惨禍によって多くの子供や
女性たちが犠牲になった。
だが、新世紀の幕開けは、
全世界の残滓にまた苦し
悩と混迷が依然として色濃
く影をおとっている。

それは、プロレタリア
の団結と解放を使命とす
る共産主義運動が、スター
リン主義によって歪められ
傷つけられた「負の歴史」
をどう乗り越えていくか、
という転機にまた立たされ
れ試験の時期一再生への
途上にある過渡期の段階
にあること、言いかえさ
ると、帝国主義と国民国家
体制は全盛を迎え、一方で
二度の世界大戦をこえ、こ
の世紀だけで数億といわれ
る人々を殺戮した戦争を引
き起こした。また前世紀か
ら引き続き解決を求められ
てきた「古の問題」——
にぎりの政治家や資本家、
豊かな者が多数の貧しい民
衆を虐げ支配するといふ不
平等がはびこっている世界
の現状は、今も形を変え
て深刻化し拡大しつつ根
本的な課題であり続け、お
り、人々の期待を裏切り何
ら解決されていない。

史の試練——真正面から
向き合おうことができない者
は、やがて失望喪失と自己
崩壊に陥るか、時勢に押し
流されるだけであろう。
ここに、旧ソ連・東欧の
女性たちが犠牲になった。
だが、新世紀の幕開けは、
全世界の残滓にまた苦し
悩と混迷が依然として色濃
く影をおとっている。

現実だ。しかも、旧ソ連
東欧のスターリン主義
「疑似社会主義崩壊以降、
依然として労働者・人民の
共産主義運動に対する不信
・失望が深刻であり、マル
クス主義と左翼自身が、そ
の存在理由を根本から問わ
れているのである。にもか
かわらず、そうした危機意
識をまったく欠き「適応不
全」に陥ったり、あるいは
その反対に時流におもね便
乗と変節を繰り返して、旧社
会党や日本共産党のみなら
ず、新左翼諸党派・諸潮
流の多くが、展望を喪失し
てしまっている(極限的に
ハルネ一年の東欧・旧
ソ連のスターリン主義「疑
似社会主義」崩壊を転換点
とした九〇年代の共産主義
運動は、第一に、共産主義運
動にとって今が、かつてな
い危機の時であり、それを
自らの再生への契機に反転
させることができるか、重
大な岐路(試練)に立たさ
れている、という状況認識
を根本的に欠落しているた
めであり、第二に、運動
組織を再構築するための新
機軸が要求され自己変革を
徹しき迫られているという
事・経済・社会の構造が、
グローバル化・新自由主義の
流れとも相まって「自己
の再生を求めて」、絶え
ず原点に立ち戻り、そこか
らあらためて自らの思想と
政治組織路線、運動組織
論を再検証し再構築する
ための新機軸を打ち立て、
もそも不可能だ。

世界が今、大きな時代の
節目、転換期にあるとは、
誰もが認めざるを得ない
。この課題——まさに歴

政治的虚栄心を満足さ
せようとするエゴイズム、
思想的な退廃や変節に陥り
やすくなる。とりわけ、今
日のような混迷した時代状
況においては、「左翼」を
自称する活動家の中にも、
このような小ブル個人主義
の怒り・憤り・悲憤、これ
らを真正面から受け止め、
自らの運動組織(論)の
原動力、血と肉にしようと
すること——これがマルク
ス主義の思想的立場
に立つということだ——が
大切である。(日本の新旧
左翼の大衆迎合主義、その
逆の大衆利用主義は、こう
いった視点、感性がいかに
欠けているかの証左と言え
る。)

2

プロレタリアートの怒り
に深く根を下ろして闘つと
いう階級的な立場・原則に
立って共産主義者として歴
史的使命を全うしようとする
目的意志(使命感)を、
自分自身の生き方や闘い・
組織にしっかりと血肉化・
内在化していかないと、時代
の大きな転換期にあつて
は、それまで(参考)お手本
としてきた先行モデル——
ロシア革命モデル(ソウイ
エト型)や中国革命モデル
(建党建軍型)——が揺ら
いだり破綻を見せる中で、
また何らかの権威によりか
かたり経済決定論(経済
還元主義)に基礎を置いて
きた理論が通用しなくなる
や、当初あったかありた
いという理想や目標が建前
になり、それとは裏腹の保
身や独善に食ひ荒らされて
しまふ。そして、シンシス
ム(投げやりで冷笑的な態
度)やわすかなこと、自己

政治的虚栄心を満足さ
せようとするエゴイズム、
思想的な退廃や変節に陥り
やすくなる。とりわけ、今
日のような混迷した時代状
況においては、「左翼」を
自称する活動家の中にも、
このような小ブル個人主義
の怒り・憤り・悲憤、これ
らを真正面から受け止め、
自らの運動組織(論)の
原動力、血と肉にしようと
すること——これがマルク
ス主義の思想的立場
に立つということだ——が
大切である。(日本の新旧
左翼の大衆迎合主義、その
逆の大衆利用主義は、こう
いった視点、感性がいかに
欠けているかの証左と言え
る。)

七〇年前後する武装闘
争の敗北も、それ自身が誤
りだったのではない。我々
蜂起派をはじめとするアン
ト系派(蜂起・革命戦
争派)の壊滅的敗北の原因
は、機軸(バルチザン
遊撃戦術)が運動戦(大衆
運動・陣地戦(組織建設
運動)・人民の海の階級形成
と結び付かず——権力の弾
圧によって分断され——乖
離を招いたまま自己展開
していた軍事優先(機能
主義)にあった。労働者・大
衆の中に分け入り大衆運動
の組織化を通して自己の戦
闘力と団結力を鍛え上げて
いく——すなわち策源・
「人民の海」を形成する——
中で、武装と蜂起の問題
を権力問題にアプローチし
ていかなければ、容易にテロ

び自らの変革を追求し続け
なければならぬのだ。
こうした思想を失った
時、つまり自己変革の道を
閉ざした時、組織(および
その担い手)は停滞を招き、
腐敗(あるいは召還)の道
に陥ってしまう。それゆえ
闘いの担い手(変革主体)
自身には、常に現状に満足
せず現状を打破しようとし
るパトスとポリシーが求め
られるのである。
社会変革(対象変革)は、
それがラディカル(根本的)
なものにならなければならない。
その変革主体(担い手)自
身の——それゆえ思想と美
実践、組織活動の在り方その
もの——変革(自己変革)
をも迫ることになる。我々
が使命とする共産主義運動
の再生とは、まさに、この
ようなこと——思想的哲学
的根幹を揺るがす闘いに
立ち上がっている。
まさに、怒れる少数者(マ
イノリティー)の存在と闘
いが、その国の仕組み(社
会構造)に潜在する矛盾・
条件としての組織的な活動
の在り方そのものの変革の
こと——を課題として追求
するものである。
自分たちの(組織の)弱
さを欠陥を明らかに克服
していくことは、その組織
自身(組織成員間)の結束
・団結をゆるぎにかけると
にもなる。言いかえすと、
弱さや欠陥を克服していく
ことは、運動・組織、路線
を鍛え上げ前進させていく
ための不可欠な原則である。
したが、組織自身の団結力の
バロメーターだということ
である。

我々には、敗北と分裂を繰
り返したアントの「負の歴
史」から、党的な団結を強
固にするこゝろに闘いの
シヨナリズムによって引き
裂かれ、様々な束縛を強い

政治組織路線を根本から
総括し、新機軸を打ち立て
創り変えていかなければ共
産主義者としての使命を全
うできない。このこと、
他の新左翼諸党派と違っ
て、我々には、いくらか意
識的・自覚的に乗り出す能
力、パトスとポリシーがあ
る。他のどの政治党派にも
ない我々のこの「特長」を
いかんなく発揮すること
が、新たな展望を切り拓く
ことにつながるに違いな
い。
我々は、虐げられ抑圧さ
れた民衆・プロレタリア
トの心の奥底にたぎる怒り
を組織し、大衆運動の前進
を切り拓く闘い(大衆的組
織活動)を通して、プロレ
タリアートの中にしっかりと
と深く根を下ろした強靱な
革命的前進政党として我々
共産同を建設していくこ
と、ここに政治・組織路線
の基軸を据え、政治組織活
動の重点を移していく。
我々にとって、組織の再
建とは、共産同を、「真に
戦える組織」に、自らを鍛
えることが生き涯をかける
に足る組織に立て直して
いくこと、変革し新たに生
まれ変わらしていくこと
だ。しかも、それは、共産
主義運動の再生に資するも
の、アントの再建と新左翼
運動の再生をも自標にした
ものである。

3

「第二の創建」を期し、
新生・共産同(蜂起派)の
出帆へ／＼に燃えて闘つ
プロレタリアートの希望の
「赤い星」を掲げて、
二〇〇〇年十二月十日
共産同中央委員会
委員長 槇渡

政治組織路線を根本から
総括し、新機軸を打ち立て
創り変えていかなければ共
産主義者としての使命を全
うできない。このこと、
他の新左翼諸党派と違っ
て、我々には、いくらか意
識的・自覚的に乗り出す能
力、パトスとポリシーがあ
る。他のどの政治党派にも
ない我々のこの「特長」を
いかんなく発揮すること
が、新たな展望を切り拓く
ことにつながるに違いな
い。
我々は、虐げられ抑圧さ
れた民衆・プロレタリア
トの心の奥底にたぎる怒り
を組織し、大衆運動の前進
を切り拓く闘い(大衆的組
織活動)を通して、プロレ
タリアートの中にしっかりと
と深く根を下ろした強靱な
革命的前進政党として我々
共産同を建設していくこ
と、ここに政治・組織路線
の基軸を据え、政治組織活
動の重点を移していく。
我々にとって、組織の再
建とは、共産同を、「真に
戦える組織」に、自らを鍛
えることが生き涯をかける
に足る組織に立て直して
いくこと、変革し新たに生
まれ変わらしていくこと
だ。しかも、それは、共産
主義運動の再生に資するも
の、アントの再建と新左翼
運動の再生をも自標にした
ものである。

我々は、敗北と分裂を繰
り返したアントの「負の歴
史」から、党的な団結を強
固にするこゝろに闘いの
シヨナリズムによって引き
裂かれ、様々な束縛を強い

政治組織路線を根本から
総括し、新機軸を打ち立て
創り変えていかなければ共
産主義者としての使命を全
うできない。このこと、
他の新左翼諸党派と違っ
て、我々には、いくらか意
識的・自覚的に乗り出す能
力、パトスとポリシーがあ
る。他のどの政治党派にも
ない我々のこの「特長」を
いかんなく発揮すること
が、新たな展望を切り拓く
ことにつながるに違いな
い。
我々は、虐げられ抑圧さ
れた民衆・プロレタリア
トの心の奥底にたぎる怒り
を組織し、大衆運動の前進
を切り拓く闘い(大衆的組
織活動)を通して、プロレ
タリアートの中にしっかりと
と深く根を下ろした強靱な
革命的前進政党として我々
共産同を建設していくこ
と、ここに政治・組織路線
の基軸を据え、政治組織活
動の重点を移していく。
我々にとって、組織の再
建とは、共産同を、「真に
戦える組織」に、自らを鍛
えることが生き涯をかける
に足る組織に立て直して
いくこと、変革し新たに生
まれ変わらしていくこと
だ。しかも、それは、共産
主義運動の再生に資するも
の、アントの再建と新左翼
運動の再生をも自標にした
ものである。

我々は、敗北と分裂を繰
り返したアントの「負の歴
史」から、党的な団結を強
固にするこゝろに闘いの
シヨナリズムによって引き
裂かれ、様々な束縛を強い

政治組織路線を根本から
総括し、新機軸を打ち立て
創り変えていかなければ共
産主義者としての使命を全
うできない。このこと、
他の新左翼諸党派と違っ
て、我々には、いくらか意
識的・自覚的に乗り出す能
力、パトスとポリシーがあ
る。他のどの政治党派にも
ない我々のこの「特長」を
いかんなく発揮すること
が、新たな展望を切り拓く
ことにつながるに違いな
い。
我々は、虐げられ抑圧さ
れた民衆・プロレタリア
トの心の奥底にたぎる怒り
を組織し、大衆運動の前進
を切り拓く闘い(大衆的組
織活動)を通して、プロレ
タリアートの中にしっかりと
と深く根を下ろした強靱な
革命的前進政党として我々
共産同を建設していくこ
と、ここに政治・組織路線
の基軸を据え、政治組織活
動の重点を移していく。
我々にとって、組織の再
建とは、共産同を、「真に
戦える組織」に、自らを鍛
えることが生き涯をかける
に足る組織に立て直して
いくこと、変革し新たに生
まれ変わらしていくこと
だ。しかも、それは、共産
主義運動の再生に資するも
の、アントの再建と新左翼
運動の再生をも自標にした
ものである。

新しい世紀(二世紀)の始まりとともに、我々は、「第二の創建」を期して新生・共産同盟として出陣するため、昨年十二月十日、同盟第一回総会を開催し同盟規約を抜本的かつ全面的に改定した。

規約改定が抜本的全面的である意味

規約の改定が抜本的であり全面的であるのは、何よりも過去の舞台——組織的停滞と歪みをもたらした旧来の組織の有り様、いわば組織のアンシャン・レジーム(旧体制)——に幕を引き、新しい舞台の幕開けを告げるため、文字通り我が同盟の「第二の創建」を期すためである。

すなわち、従来の(「さざり派」時代の)組織建設と組織活動の在り方を抜本的に見直し、総括し、組織路線そのものを根本から変革・再構築して、我が共産同盟(再建)へのエポック・メイキングを刻印することにその眼目がある。

またそれは、規約の全面的改定・一新という形をとった「組織の革命」に等しいものであり、新生・共産同盟の出陣宣言に他ならないのである。

搾取され抑圧され虐げられた民衆(プロレタリア)を資本のくびきから解放することを使命とする共産主義者の組織(政治結社)の規約には、どういふ組織をいかに創るか、どんな組織にしていくか、という組織思想が、(その根底には)体現されている。それゆえ、規約をどう改め、根本精神が、どんなものであり、組織(建設)活動へ

のパスが、どのように込められているかは、重要なポイントであって、規約の中心を吟味する上で最も関心を払うべき点である。

今回の新規約の策定にあたっては、我が同盟のこれまでの規約(前九六年規約、それ以前の旧規約、第二次プロト(六六年規約)、第一次プロト(五九年三月規約)そして、レーニン(ロシア共産党二年規約、マルクス(共産主義者同盟規約・一八四七年)、七〇〇年改定、スターリン(連共産党・三四年)のそれと対照して、それぞれがどう違つたのか、何故違つたのかを比較し検討することから始めた。

それによって、これまで自明のこととしてきた自分たちの「組織原則」が、実は思い込み(固定観念にとられていた)ことによるもの、物神化されたものであったこと、マルクスやレーニンのそれと異なった(異質で似ても似つかない)ものであったことが明らかになった。そして、絶えず原点に立ち戻って全てを「一から自分の頭で考え、自分たちの現状(組織の有様)を批判的に捉え返すべきこと、実践活動の中で常に自己検証を怠らない姿勢こそが、共産主義者には求められているのだということを、思い知らされたのである。

とりわけ、蜂起派結党以来の旧規約が、「黨員(兵士、中央委員、軍事委員)の超(ワルト)軍事戦略優先型の組織路線——軍(兵士)から党をつくる

共産主義者同盟規約の全面改定について

とされた毛沢東思想の影響が極めて濃く「建設軍」路線——につらぬかれたものであり、一次プロト・二次プロトの規約とは著しい断絶をみせていて、まったく別の代物であったこと(客観的条件の制約や主体的条件の困難を考慮に入れても)、その意味では、極めて特異な、レーニン主義とも相入れない規約であったことをあらためて自覚せざるをえなかった。

このように、かなり以前からその破綻が明白になっていたにもかかわらず、二十年以上もわたって組織の有様を規定し、様々な歪みや停滞をもたらしてきたことについては、ベース

として再建できるかどうかは、どれだけ深く労働者階級の中に根を張った組織を創れるかだ。ここに、その一切がかかっている。

それには、一九五八年十月十日、日本共産党・スターリン主義と自らを明確に区別した新たな革命的プロレタリア政党——前衛政党的建设を目指して旗揚げした第一次プロトの結党の精神にも一度立ち戻ることが必要だ。そう確信し、我が同盟の新規約は、この第一次プロトの規約(五九年三月)——それは、マルクスの共産主義者同盟規約(一八四七年十二月)をもとにしている——をベース

はとっていないことである。それは、すでに述べている通り、第一次プロトも、そして、その基礎としたマルクス(共産同盟規約)も、さらにレーニン(ロシア共産党二年規約)も、「前文」という形式はもちいていないからである。我々も基本的に「前文」による(この形式を引き継ぐこととした。「前文」が規約の通例になったのは、おそらくスターリンや日本共産党のそれからであろう。我々の前規約、旧規約に於いても「前文」という形式をとっていたのも、それが「通例」だと誤解していたからだ。

第一章 同盟の目的と基本任務

第一条 同盟の目的は、帝国主義・ブルジョアジーを打倒し、プロレタリアによる蜂起——政治権力の奪取、すなわち、プロレタリア革命を実現して、資本主義のくびき、あらゆる搾取・差別・抑圧からプロレタリアートを解放すること、階級支配および階級そのものを廃止し階級の無い、したがって、全ての人々の生存と自由が何ものからも束縛されたり脅かされたりすることなく真に保障される新しい社会、共産主義社会の建設を成し遂げることにある。

第二条 同盟は、この目的を遂行するために、労働者人民・被抑圧民族の怒りに深く根差したプロレタリアートの団結と解放の岩として、また革命的な前衛闘士として、マルクス主義・レーニン主義の理論を基礎にスターリン主義の歪みを克服・止揚して、それと自らを明確に区別した新たな革命的プロレタリア政党の建設、反帝国主義とプロレタリア国際主義に貫かれた国際共産主義運動の再生と前進、そして第五インターナショナルの創設に努め、全世界の根底的(ラディカル)な変革を目指し共産主義革命の勝利に向けて闘つ。

第二章 同盟員

第三条 同盟員の条件・義務は次の通りである。

(一) 同盟の規約を認め、同盟の一定の組織に加わり、同盟の決定・方針に従って活動する者は、同盟員と見なされる。同盟の指導する一定の組織活動を担っている者は、同盟員候補と成ることができ、同盟員加入しようとする者は、全て候補期間(原則として二年以上)を経る。

(二) プロレタリアートの団結と解放のために、闘いと組織(建設)に生きる共産主義者として、鉄火の訓練に立ち向かい自らの歴史的な使命を果たそうとする革命的な意志と情熱およびエネルギーを持っていること。

(三) 同盟員は、会議への参加、機関紙誌の購読、同盟員の納入の義務を負い、自己の活動に関して(および同盟以外の他の団体に関係した場合)、指導部に報告し点検を受けなければならない。

(四) 同盟員は、同盟の諸決定に従い、それを実践しなければならない。

(五) 同盟員は、同盟内部のあらゆる諸問題・諸事情に関する機密を守らなければならない。

(六) 同盟員は、マルクス主義・レーニン主義——マルクス・レーニン主義——を覆護・発展させ、共産主義の理論学習と大衆の中での宣伝・煽動・組織活動に努めなければならない。

第四条 同盟員には、規約および組織原則に基づいた同盟内での思想闘争・討論の自由、批判・反対意見提出の権利が保障される。

第五条 規約(同盟員の条件・義務)に違反したり、また正当な理由なく任務を逸脱(あるいは放棄)したり、同盟費の納入を(三月以上)怠つた者、階級的立場に著しく反した者は、その事情に応じて同盟員としての権利停止、または同盟からの除籍・除名の処分(場合によっては監視)を受ける。処分を受けた同盟員は、異議の申請を行い最高決定機関に至るまでの中央機関に再審議を求められることができる。

第三章 同盟の組織構成

第六条 同盟は、民主主義的中央集権制の団結の原理(組織原則)に基づき、基礎組織、地方委員会(東京都、関西地方、関東地方、東北地方、北海道、青森、岩手、秋田、山形、福島、茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川、新潟、富山、石川、福井、山梨、長野、岐阜、愛知、三重、滋賀、京都、大阪、和歌山、奈良、徳島、香川、高松、岡山、広島、山口、福岡、佐賀、長門、熊本、大分、宮崎、鹿児島、沖縄)を擁護・発展させ、共産主義の理論学習と大衆の中での宣伝・煽動・組織活動に努めなければならない。

第七条 同盟の最高決定機関は、総会(または大会)であり、中央指導機関は、中央委員会である。中央委員会のもとに地方委員会が設けられる。

(一) 総会(大会)は、同盟全体の最高意志決定機関であり、中央委員会を選出する。総会は、中央委員会によって招集され、同盟員またはその代表員をもって構成される。緊急の場合には、中央委員会は臨時の総会を招集することができる。

(二) 中央委員会は、同盟の中央執行機関であり、同盟全体の活動を指導する。中央委員会は、中央委員准中央委員(評議権を持つ)が議決権を持たない)によって構成され、委員長、副委員長および政治局を選出する。政治局は、中央委員会の方針に基づき、同盟の当面の政治的組織的活動全体を指導し、組織局を設ける。組織局には、編集部、財政部等を設ける。

(三) 中央委員会は、同盟全体の重要問題を討議し統一意志の形成を図る必要がある場合、また決定(総括・方針)を徹底するにあたって全国協議会や特定の問題に関する活動者会議を開くことができる。

(四) 中央委員会は、特別な事情のもとでは、中央委員および准中央委員の解任、または補充をすることができる。その場合、次の総会に報告し承認を受けなければならない。

第八条 同盟の財政は、同盟費、同盟の事業収入、寄付等によってまかなう。同盟費は、中央委員会によって定められ、組織局財政部が管理し、その収入および支出についての報告を総会にしなければならない。全世界のプロレタリア、団結せよ、

た——それゆえ組織再建の桎梏になっていた——「建設軍」の組織路線と規約を止揚するために、それにとって代わる規約として創られたのが九六年の前規約であった。

もとより上辺を取り繕った「古くなった上着を裏返す」だけではだめだ。それでは、厳しく迫られた我が同盟の組織建設の再総括をなしえずプロトの「負の歴史」から教訓を学ぶこともできない。

第一次プロト規約の原点に立ち戻る

我が共産同盟(プロト)を真に革命的な前衛政党として創らなければならない。内容的に新規約の内容についていくつか挙げる。

まず、第二章の「同盟の目的と基本任務」について

第一条の「同盟の目的」は、いわば綱領的・思想的な目的を述べ、第二条は、その目的を遂行するための戦略的任務、政治・組織路線について提起している。第一次プロト規約においても文面こそ違つが、一条二条で、この同盟の思想的・政治的・組織的任務を明らかにしている。ここで、注意して見てもう一つの点は、「前文」という形を、今回の新規約で

を担ったことも(また担うつもりも)無い講壇マルクス主義者が、このことをほとんど軽視し無視しているのは、自らをいかに実践の「厳しさ」から切り離し主体を問わないでいるかを物語っている。しかも、こうした者ほど、レーニン時代の党規約には、マルクスのそれに該当する「厳しい」処分規定など一切なかったにもかかわらず、(まったくトンチンカンにも)レーニンをスターリン(主義)の先行者に仕立ててさげすんでいる。

第三章の「同盟の組織構成」では、「民主主義的中央集権制」の組織原理に基づき、マルクス・エンゲルス8巻選集といつたように、「監視して無害とする」ところにまで踏み込んで書かれている。ただし、一八五一年規約では「被除名者については、……同盟の監視下におく」という形にソフトになっている。

いずれにせよ、マルクスの共産同盟が、秘密結社であることを余儀なくされ、一八五二年に結成からわずか五年で解散に追い込まれるという困難な時代状況にあったとしても、このように「厳しい」処分を課していたことについては、注目すべきである。共産主義運動——革命的実践——組織活動すべきものなのである。

このように規約は、それをつらぬく精神・原則を継承しつつ、絶えず歴史的条件と組織建設の段階に照応する活動方法・形態を模索する中で改められていくべきものである。

野宿労働者連帯運動をさらに前進させ 全下層を組織する新たな闘いの地平を!

草野 勁

底辺・下層全体へと 広がる可能性を持つ 野宿労働者連帯運動

激動と混乱の二〇世紀を 終え、我々は新たな時代を 迎えた。それは単に世紀の 変わり目というに止まらな い「時代の岐路」に立ち臨 んでいるということでもあ る。戦後の日本資本主義の 歴史を紐とけば、大失業時 代と言われた時期は数多く あれ、企業社会を規範とし たる「終身雇用制度」と「年 功序列」の枠組みが大きく 崩れ、全産業での就労構造 が劇的に転換して労働者の 基本的権利が著しく損なわ れてきた時代はかつてな かったと言え、全就労者 人口の約二割が「期間・ パート」へと転換させられ、 日雇労働と変わらぬ不安定 就労を余儀なくされる時代 の中で、労働運動のあり方 も当然ながら見直しを迫ら れているのである。

我々は八〇年代初頭から 山谷一帯を策源地とした 労働運動の創出を訴え、日 雇労働者の実相から 資本主義の支配構造を暴き 出し、矛盾の煮詰まる集中 的集約点として寄せ場を措 定してきた。しかし現在、 資本主義の矛盾を一身に背 負わされているのは個別寄 せ場・日雇労働者に限られ ない。全産業で労働力の使

捨て支配が拡大した結果と して、全国三万人以上に膨 れ上った野宿労働者の存在 を捉える必要がある。 二〇世紀最後の十年間、 この国の底辺で呻吟する 野宿労働者の闘いは、文字 通りの飛躍的な前進を遂げ てきた。九二年釜ヶ崎暴動 を発火点とした反失業の火 の手は、失業の結果として の野宿一帯民化の攻撃に抗 する大衆運動として燃え広 がり、九四年山谷一帯新 宿として全国へ波及する反失 業運動が個別寄せ場に限ら れることなく展開されて いった。「俺たちはゴミじゃ ない」という最も原始的 なスローガンを台言葉とし て始められた東京での運動 は、「俺たちはゴミじゃない」という最も原始的 なスローガンを台言葉とし て始められた東京での運動

は、「俺たちはゴミじゃない」という最も原始的 なスローガンを台言葉とし て始められた東京での運動 は、「俺たちはゴミじゃない」という最も原始的 なスローガンを台言葉とし て始められた東京での運動

は、「俺たちはゴミじゃない」という最も原始的 なスローガンを台言葉とし て始められた東京での運動

は、「俺たちはゴミじゃない」という最も原始的 なスローガンを台言葉とし て始められた東京での運動

は、「俺たちはゴミじゃない」という最も原始的 なスローガンを台言葉とし て始められた東京での運動

「オリンピックのため」と 制排除を許さない集会特別 決議は行動の目的を鮮明に 表したものであった。し かし「俺たちはゴミじゃない」という最も原始的 なスローガンを台言葉とし て始められた東京での運動

は、「俺たちはゴミじゃない」という最も原始的 なスローガンを台言葉とし て始められた東京での運動

は、「俺たちはゴミじゃない」という最も原始的 なスローガンを台言葉とし て始められた東京での運動

は、「俺たちはゴミじゃない」という最も原始的 なスローガンを台言葉とし て始められた東京での運動

は、「俺たちはゴミじゃない」という最も原始的 なスローガンを台言葉とし て始められた東京での運動

は、「俺たちはゴミじゃない」という最も原始的 なスローガンを台言葉とし て始められた東京での運動

は、「俺たちはゴミじゃない」という最も原始的 なスローガンを台言葉とし て始められた東京での運動

は、「俺たちはゴミじゃない」という最も原始的 なスローガンを台言葉とし て始められた東京での運動

は、「俺たちはゴミじゃない」という最も原始的 なスローガンを台言葉とし て始められた東京での運動

は、「俺たちはゴミじゃない」という最も原始的 なスローガンを台言葉とし て始められた東京での運動

は、「俺たちはゴミじゃない」という最も原始的 なスローガンを台言葉とし て始められた東京での運動

は、「俺たちはゴミじゃない」という最も原始的 なスローガンを台言葉とし て始められた東京での運動

は、「俺たちはゴミじゃない」という最も原始的 なスローガンを台言葉とし て始められた東京での運動

は、「俺たちはゴミじゃない」という最も原始的 なスローガンを台言葉とし て始められた東京での運動

は、「俺たちはゴミじゃない」という最も原始的 なスローガンを台言葉とし て始められた東京での運動

は、「俺たちはゴミじゃない」という最も原始的 なスローガンを台言葉とし て始められた東京での運動

は、「俺たちはゴミじゃない」という最も原始的 なスローガンを台言葉とし て始められた東京での運動

は、「俺たちはゴミじゃない」という最も原始的 なスローガンを台言葉とし て始められた東京での運動

は、「俺たちはゴミじゃない」という最も原始的 なスローガンを台言葉とし て始められた東京での運動

は、「俺たちはゴミじゃない」という最も原始的 なスローガンを台言葉とし て始められた東京での運動

1・14

日雇全協総決起集会

佐藤満夫さん 虐殺16カ年、山岡強一さん 虐殺15カ年弾劾/国粋会金町一家解体/主催/全国日雇労働組合協議会(日雇全協)

●1月14日(日)午前10時/山谷玉姫公園(集会後7時)

フランスの反失業運動の担い手 クリストフ・アギトン氏来日講演

藤川次郎

反排除・反失業を闘う国際労働組合SUO(連帯)の取り組みが成功裡に勝ち取られた。

フランスにおける「排除された人々」の闘いを先頭で担ってきたクリストフ・アギトン氏の来日が実現した。アギトン氏は、一九五三年に生まれ、十五歳の時に体験した六八年五月革命を原点に、大学卒業後、電話通信の労働組合運動に携わるが、組合のあり方を批判して、八八年に新

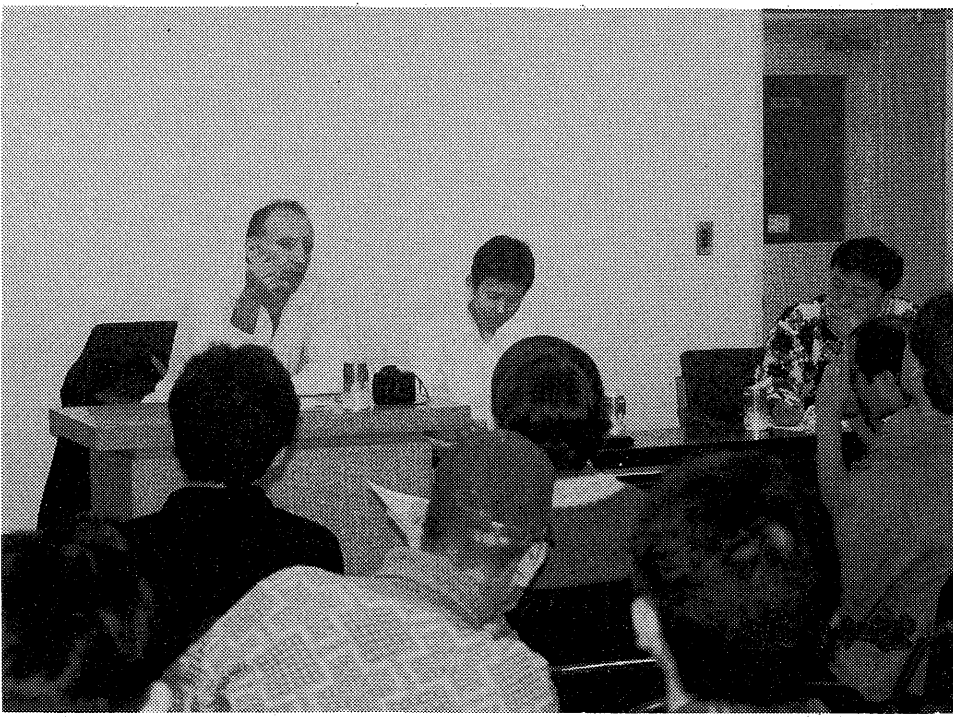
しい労働組合SUO(連帯)に参加し、統一・民主主義に賛同し、パート・派遣・外国人労働者の運動からホームレスの支援まで積極的に取り組んできたクリストフ・アギトン氏は、一九九三年にはACN(失業に反対して連帯行動を)を結成。失業者自身による多様な占拠闘争・直接行動を展開しつつ、失業と社会的排除に反対するヨーロッパ大行進(一九七七年)など、国境を越えた連帯運動も創りだしてきた。そうした成果をふまえて、現在ではAATACという運動体を軸に反グローバル化の闘いを広げている。

今回の来日ではまず、一月二十一日に、アジエ21による囲む集いと交流会が行われ、フランスの運動の軌跡とわが国九〇年代以降の意義を中心として、今日の国際連帯の課題について提起され、質疑や意見交換も活発になされた。翌二十二日は、午前中からテ

その後の質疑から「レラ・アントの排除をめぐっての攻防が煮詰まる」と野公園を訪ねる。折しも、公園緑地事務所に向けた全都の仲間による抗議行動に合流する。この出来、現場で開かれた集会では、アギトン氏から思いを込めた連帯のあいさつがなされ、仲間たちも共感の拍手で応えた。

また今回の取り組みに際してはフランスの運動を伝えるに当たって稲葉奈々子(茨城大学教員)さんに、通訳を含めて終始サポートしていただいた。

以上をふまえて、両日にわたるアギトン氏の講演の中心を整理して、今号(上)と次号(下)の二回にわたって提起してゆきたい。



講演するクリストフ・アギトン氏(11月22日、日本キリスト教会館)

朝は野宿者の方々の抗議行動に参加して、ヨーロッパと同じ問題がある現実を確認することができました」と述べ、「一年前にも日本に来ましたが、その時からシートルをはじめ世界的なレベルで新しい闘いが構築されている」「今日は講演会にするつもりはありません。フランスと日本の相違点を明らかにしながら、どうやって一緒に運動を創ることが出来るかを話したい」と前置きをし、テーマを提示しながら話された。

フランスの一九八〇年代における社会運動の後退から、九〇年代とわが国九三年〜九五年にかけて新しい社会運動が生まれ、広がっていった。その特徴は大きく三つ挙げられる。

一つ目は、ラディカルな戦術が社会に衝撃を与えたことである。例えば、エールフランスの労働者が空港の滑走路を占拠する。あるいは、ドラゴン通り七番街の闘いに見られる空きビルの実力占拠、そして多種多様な占拠闘争やストライキ

時に、失業率の高さだけでなく、失業の質が変化してきたことを見ておかなければならない。それまでは、失業は例えば鉄鋼業のように業種に集中したり、資格をもちない労働者が圧倒的だった。それが九〇年代になると、資格を持った者、管理職、そして若者層に広がり、誰にとっても失業が身近な問題となったことで危機意識が高まった。これは、失業の原因は個人という風潮が強くなり、失業者がデモに参加することもむずかしい状況があった。それが、失業者自身が運動を組織して、ホームレスや移民労働者の運動と結びついてゆけるようになった。

山谷

上野公園の陣形を打ち固め 冬の時代を撃つ冬の闘いを!

〇〇一山谷越冬・越冬闘争を目前に控えた十二月二十二日、支援連帯集会が開かれた。今回は、上野公園におけるテナントの排除をめぐる攻防が焦点となつていて、時期もあつて会場が上野(台東区出張所)に設定された。会場には、上野をほじめ、隅田川、新宿、池袋など各地の仲間たちが支援者を集まり、例年になく気概と熱気がみなぎる。集会に先立ち、昨年の越冬闘争を中心に編集されたビデオが上映された。

集会ではまず、渦中の上野公園の闘いの報告と方針が提起される。科学博物館前のエリアで生活する二十三名の野宿者に対して、東京都建設局の決定を受け、東部公園緑地事務所は工事の理由に十一月末までの退去を通告してきた。この一方的な排除攻撃に対して上野公園の仲間が寄り合いを軸に、連日わたる抗議行動が闘い抜かれてきた。テナントの仲間を中心として監視行動、団交要求、公園内デモ、通行人へのビラ配りなどを積み重ね、ついに年内着工断念に追い込み、交渉代替地の提案を引き出すに至っている。しかしながら強化してゆくことで、今年

釜ヶ崎

「排除と収容」を撃つ 野宿労働者の闘いの前進へ!

第三十一回釜ヶ崎越冬闘争は「仕事をせよ!住居をよこせ!」「府市全域の野宿の仲間と共に闘え!」「わらの自立した生活をかちとせ!」「府市・政府は野宿労働者・日雇労働者に仕事保障・生活保障を行え!」「一人の野垂れ死にも許さず越冬闘争を闘え!」をスローガンに闘われ、十二月十九日の支援連帯集会から二十五日の三角公園での突入集会、そして集中期の闘いと越冬美の下のりくまれる。

しかし、行政とりわけ大阪市の「施策」は、長居公園「仮設一時避難所」建設が端的に示している通り、あいも変わらず「排除と収容」を基本とするものだ。実際、公園や路上でやむを得ず野宿を強いられるきた仲間たちが、「シェルター」に行け「シェルター」に行け「あるいは最近では「長居公園に行け」と市職員による追い出し攻撃にさらされている現実を、我々は決して看過することなどできない。それは、辛苦の中で仲間たちが築き上げてきた野宿生活の現場を「出口」(就労)の見えない「収容」によって奪われ

あらためて「冬の時代を越える冬の闘いを」の内実を当該・支援とともに創りだすことが問われていると提起された。

三里塚 反対同盟の決意に応え 暫定滑走路建設阻止へ

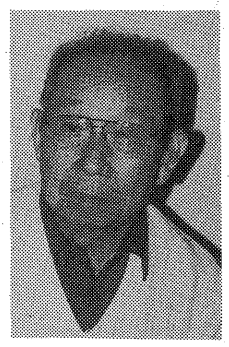
二〇〇一年を勝利の年とすべく、決 申し入れを行った。しかし、一方で成意も新たに闘いに起つ三里塚芝山連合 田に民家の上空だった四十メートルに 空港反対同盟からの、年頭アピールを 航空機の離発着を前提とした暫定滑走 路建設を強行しながらの申し入れが、 掲載する。

一昨年十二月より強行された、暫定 滑走路建設工事は、工事が進むにつれ 計画のずさんさが明らかになってい る。反対同盟の指摘で明らかになった 東峰神社の立木問題をはじめ、できた ところで使えないものにならない滑走路で あることが鮮明だ。行き詰まった成田 を見限り、運輸省は二月一日から羽田 空港への深夜・早朝の国際線就航を決 定し、羽田空港国際化への突破口を開 くとしている。

これに対し千葉県は、木更津市の騒 音問題を理由に難色を示し、運輸省に 設置阻止の勝利に大きく踏み出してい くとしている。

田は国内線」という取り決めのなかで 強制収用をはじめとする強権による成 田空港建設を容認してきた千葉県を追 いつめ、千葉県の意向を押し切っても 羽田国際化に踏み切らざるを得ない事 態に権力を追いつめたことは、反対同 盟の闘いの勝利である。暫定滑走路建 設阻止の勝利に大きく踏み出してい くとしている。

反対同盟年頭アピール



反対同盟事務局長 北原 敏治

追いつめられた政府・公団 暫定滑走路に大義はない

全国で闘つたみなさんへ年 頭の挨拶をおくりします。

昨年の闘いは、暫定滑走 路粉砕をめぐる大きな闘い の年でした。二〇〇〇年の 平行滑走路完成を掲げなが ら、反対同盟の闘いの前に 敗北した運輸省・空港公団 は、暫定滑走路建設を打ち だし、工事を強行していま

敷地内の東峰・天神峰部 落は家屋と畑を残し鉄板 フェンスで囲い込まれ、文 字どりの軒先工事が強行 されています。広々とした 大地が囲い込まれ切り刻ま れています。反対同盟は、 一坪共有地 開拓道路をし て敷地内反対同盟の家屋畑

判をラウンドテーブルにお こなうと提案してしまし た。これは明らかに金で示 談にしようという意図 図で出されたものです。反 対同盟は当然にもこれを粉 砕しました。われわれは、 金のために闘っているの はありません。運輸省・公 団による農民殺しの空港建 設を粉砕する闘いです。の らら裁判の引延しを図る 運輸省・公団を追いつめ勝 利します。

昨年、婦人行動隊長と して闘いの先頭に立つてき た都司とめさん、そして、 小川徳太郎さんという二人 の同志を失いました。故人 の遺志を継ぎ闘います。

三月には、全国総決起集 会を開催します。勝利にむ けて進撃しましょう。全国 からの結果を呼びかけてま す。山谷、新宿をはじめ全 国で野宿を余儀なくされて いるみなさん、厳しい冬、 体をいたわって共に春の闘 いに決起しましょう。

計画の段階でさえ、国際 空港としては使えないものにな らない短く危険な滑走路で あるといわれている暫定滑 走路は、ここに来て、様々 な矛盾が明らかになってき ています。東峰神社の立木 の問題もそうです。このよ うな危険で役に立たない滑 走路建設には何の大義もな ありません。

反対同盟は、現地での連続 闘争、敷地内デモを闘つと 同時に、二期工事差し止め 訴訟、工事実施計画の変更 認可処分取消訴訟を千葉地 裁に提訴し、法にらして も矛盾に満ちた暫定滑走路 を粉砕すべく闘っています。裁判官は、当初の裁

平行滑走路は絶対できない 叩き出し攻撃に屈せず闘う



敷地内東峰 萩原 進

二〇〇〇年の闘いを振り 返つてみて、反対同盟の勝 利の年だったと確信してい ています。二〇〇〇年の平行滑 走路完成計画を、反対同盟 が闘つてつち切ったからこ そ、暫定滑走路の計画がで てきた。国際空港としては 短く使えないものにならない 滑走路をあえて造ろうとす

権力の本音は、あくまで も平行滑走路の建設にあ る。しかし、我々がここに 居座って闘っていること で、平行滑走路の完成は全 く展望がなくなっています。

暫定滑走路ではない こと自体、我々が追い込ん だ結果だと思えます。 空港公団は、暫定滑走路 の工事を、平行滑走路関連 工事と言い換えているが、 もはや、平行滑走路は、絶 対できないところまで追い 込んでいます。

この、行きつまりの中で 羽田空港の国際化や、首都 圏第三空港建設計画が進ん

暫定滑走路ではない こと自体、我々が追い込ん だ結果だと思えます。 空港公団は、暫定滑走路 の工事を、平行滑走路関連 工事と言い換えているが、 もはや、平行滑走路は、絶 対できないところまで追い 込んでいます。

この、行きつまりの中で 羽田空港の国際化や、首都 圏第三空港建設計画が進ん



敷地内天神峰 市東 孝雄

新しい年を迎え 全力投球でがんばります

三里塚闘争に心を寄せ全 国で闘つみなさん。

父・市東東市の遺志であ る「空港反対」、そして家 族と農地を守つていこうと 三里塚の地に戻り一年が過 ぎました。この一年は、わ たしなりに一生懸命の一年 でした。

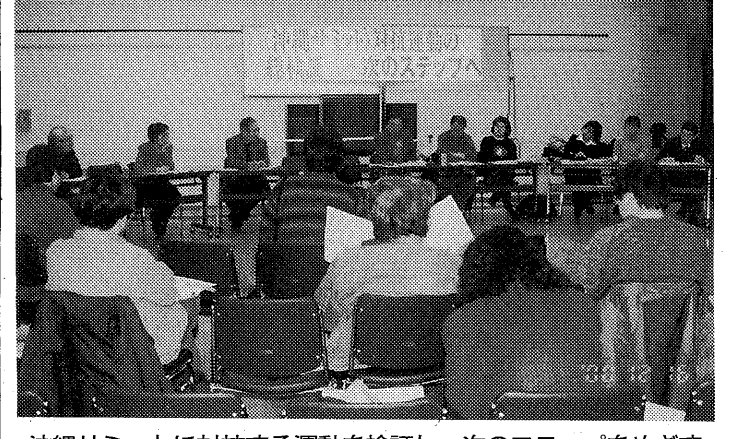
暫定滑走路の工事が強行 されるなか、天神峰の風景 を破壊するのは明らかです。 このような工事を、説明も なく、ましてや了解もなく 強行してよいものではありません。

また、警備と称して一日 中、私服刑事が徘徊します。 家のそばで車を止め、カメ ラをもちながら敷地や家の なかまで伺っています。家 にくる車、人の全てを監視 するようないやがらせ、人 権侵害がまかり通っている のです。三里塚でも、全国 のどこにおいてもこのよう な人権侵害を許さず闘いま しょう。

新しい年を迎え、これか らも全力投球でがんばりま す。これからもよろしくお 願いします。

全国のみならず、一月八 日の旗開き、そして三月の 全国総決起集会を共に闘い ましょう。多くの皆さんの 参加をお願いします。

縄 普天間飛行場の名護移設を阻止しよう 沖 安保を揺るがす沖縄の闘いと連帯を



沖縄サミットに対抗する運動を検証し、次のステップをめざす 12・16集会 (於/文京区民センター)

日本政府は新たな世紀に おいても沖縄を基地の重圧 の下に縛りつけておこうと している。普天間飛行場の 名護・辺野古への移設策動 は、MV22オスプレイを配 備しようとしていることを みれば明らかである。新 たな基地建設であり基地機 能の強化であることは論を またない。日本政府は、米 国の世界への軍事展開に積 極的にコミットし参戦体制 をつくりあげていくため、 沖縄に犠牲を集中させてい る。まさに世紀をまたいで 沖縄を国内植民地として、 基地の島であることを強制 しようとしているのだ。 これに抗して沖縄の民衆

「基地はいらない」闘 いを継続してきている。し かし一直線ではない。

去る十一月に行われた那 覇市長選では、「初の女性 市長」親泊市長の後継者」 を目指した堀川候補が敗 れ、那覇市長は「政府与党 に迎合する体制」になった。 沖縄における「反戦運動は これまで以上に苦難の道な った」といえる。

「首長の選挙だけではあ りません。やむにやまれない民 衆の想いは、必ずや新たな 道を切り開いて進むに違い ない」と上原成信氏は語る。 「『一坪反戦通信』No.11 八

また、警備と称して一日 中、私服刑事が徘徊します。 家のそばで車を止め、カメ ラをもちながら敷地や家の なかまで伺っています。家 にくる車、人の全てを監視 するようないやがらせ、人 権侵害がまかり通っている のです。三里塚でも、全国 のどこにおいてもこのよう な人権侵害を許さず闘いま しょう。

新しい年を迎え、これか らも全力投球でがんばりま す。これからもよろしくお 願いします。

全国のみならず、一月八 日の旗開き、そして三月の 全国総決起集会を共に闘い ましょう。多くの皆さんの 参加をお願いします。

共催。 他にも沖縄でサミット が開催された目的は、沖縄 に米軍基地を固定化し「安 保のために沖縄は犠牲にな れ」ということだ。これに 対抗する運動が民衆の中か ら多様に展開されたこと の中に沖縄民衆の怒りが表現 されている。